
史料翻訳

ヨーゼフ・リヒター著 『なぜ皇帝ヨーゼフは民に愛されないのか?』

訳者 上村 敏郎

【解題】

ここに訳出した『なぜ皇帝ヨーゼフは民に愛されないのか?』¹⁾(以下、『愛されないのか?』と省略)は1780年代ハプスブルク君主国を統治した啓蒙君主ヨーゼフ2世の治世で出版されたパンフレットの中でもっとも有名なものの一つである。1787年7月にウィーンで出版され、扇情的なタイトルの効果もあり、すぐにウィーンの読者を魅了し、世界へと広がっていった。1787年7月13日付の『プルノ新聞』はこの作品の出版直後の印象を伝えている。

誰もが最初、この書籍がこれまで布告された政令に関して悪態をついているゴミクズ作品の一つであると思っていた。しかし、内容を知るにつれて、すぐに間違った思い込みをしていたことに気づいた。というのも、結局のところ、[この作品の中では]愛の欠如が前提とされているのだが、これは臣民の中でも無知で不寛容で古き偏見にとらわれた階層にしか当てはめられておらず、著者はこの書籍の中でこの層の誤りを悟らせようとしているのだ²⁾。

1) Joseph Richter, *Warum wird Kaiser Joseph von seinem Volke nicht geliebt?*, Wien, 1787.

2) *Brünner Zeitung der k.k. priv. mährischen Lebenbank*, 56/1787, 13.7.

フランス革命で活躍したミラボー男爵もベルリン滞在時にこのパンフレットを手に入れ、内容を高く評価し、自分の本の中でフランス語に訳出している³⁾。ウィーンでもこの作品をきっかけに多くの反論パンフレットが生み出され、皇帝の政策が公共圏上のテーマとなった。

『愛されないのか?』は概説書などでは皇帝を批判する書物の代表としてタイトルがあげられることが多い。しかし、上に引用した『ブルノ新聞』の記事がこの作品を単純な皇帝批判書と評価していないことからわかるとおり、これを皇帝批判の典型と捉えることは危険である。『愛されないのか?』に対しては、研究者の間でも必ずしも評価が一定であるわけではなく、予断を持つことなく内容を吟味する必要がある史料だろう⁴⁾。

このパンフレットは、短いながらも(1787年までの)ヨーゼフ2世の改革の概要とその問題点を描き出している。こうした観点からこれから啓蒙期のハプスブルク君主国の歴史を学ぼうとする者にとっても有用なテキストになるだろう。ただし、この作品の著者ヨーゼフ・リヒターはそれまでウィーンの公共圏で起きていた論争を踏まえてこの作品を書いているため、その経緯を理解していないと多少わかりにくい部分が存在することは留意していただきたい。

ここで簡単に作品が描かれた時代背景について述べておきたい。この作品で主題となっているヨーゼフ2世は1765年よりマリア・テレジアの共同統治者として、また、彼女の死後1780年からは単独統治者としてハプスブルク君主国を統治した皇帝である。『愛されないのか?』が示すとおり、単独統治期にヨーゼフ2世は矢継ぎ早に改革をおこない、ハプスブルク君主国を法的に平等な臣民からなる統一国家として再編しようと試みた。代表的なものを挙げれ

3) Honoré-Gabriel de Riquetti de Mirabeau, *De la Monarchie Prussienne, sous Frédéric le Grand: Avec un Appendice Contenant des Recherches sur la situation actuelle des principales Contrées de l'Allemagne*. Tome Septième. London, 1788, 241–262.

4) この作品に対する訳者の評価については、拙著「ヨーゼフ2世期におけるウィーンパンフレット作家の政治的挑戦——ヨーゼフ・リヒター『なぜ皇帝ヨーゼフは民に愛されないのか?』を中心に——」『東欧史研究』27(2005)、44–66、もあわせて参照のこと。

ば、宗教寛容令、出版検閲の大幅な緩和、行政区画の再編、刑法典、民法典の編纂、地租改正などである。こうした改革は、訳出したパンフレットでも描かれているとおり、痛みを伴うものであり、多くの抵抗勢力を生み出すこととなった。1789年にフランス革命が勃発し、君主制全般に危機が生じたこともあり、改革の推進は困難になり、ヨーゼフ2世は病床の中でその多くを撤回した。こうした歴史の大まかな流れの中で『愛されないのか?』が出版された1787年7月という時期は、当初啓蒙主義者から熱狂的に受け入れられたヨーゼフ改革がはらむ様々な問題が認識されてきた時期であろう。『愛されないのか?』はこうしたヨーゼフ改革の問題点を網羅的に整理し、提示した。ここで繰り広げられる批判は、啓蒙化されつつも、日常的な慣習の否定を拒むウィーン市民の心理的抵抗感を示しているようにも思える。

著者ヨーゼフ・リヒター (Joseph Richter, 1749-1813) は、1749年3月16日に食器商の長子としてウィーンに生まれた。イエズス会系の学校を出た後、1775年に処女作の詩集を出版し、その後数多くの劇作、小説、政治批評などの著作を残している。代表作には文学研究の中で郷土文学として高く評価されているウィーン方言を用いた『アイベルダウアーの手紙』がある。リヒターをどのように評価するかに関してもパンフレットの評価同様、非常に難しい問題が存在する。ヨーゼフ2世時代の作家に共通する問題でもあるのだが、それは御用作家と啓蒙作家という二面性である。リヒターは1782年頃から秘密警察基金から月額30グルデンの活動費を受け取っていた可能性を指摘されている⁵⁾。その一方で、書籍商ゲオルク・フィリップ・ヴーヘラーの下で数多くの政治的パンフレットを書いている。ここに訳出した『愛されないのか?』もヴーヘラーの下で書かれた政治批判パンフレットの一つである。パンフレットの内容から判断するに、おそらくこの作品は警察とは関係ない著作であろう。また、もう一つ重要な点は、秘密結社ドイツ・ユニオンとの関係である。『愛されないのか?』の出版者であったヴーヘラーが幹部であったドイツ・ユニオンにリ

5) Hans Viktor Pisk, *Joseph Richter (1749-1813) Versuch einer Biographie und Bibliographie*, Diss. Wien, 1926, 21.

ヒターも所属していた⁶⁾。

最後に翻訳について、述べておきたい。この翻訳は、訳者の修士論文巻末につけた対訳訳文をもとに、書籍商ヴァーヘラーが出版した初版本 Joseph Richter, *Warum wird Kaiser Joseph von seinem Volke nicht geliebt?* (Wien: Georg Philipp Wucherer, 1787, 63.)⁷⁾ を底本として改訳したものである。本稿では原則として Nation は国民、Volk は民、Untertan [Untertan] は臣民と訳しわけた。18 世紀後半における Nation は近代国民国家の文脈で語られる Nation とは一致せず、リヒター自身、わざわざパンフレットの冒頭で Volk を Nation と関連づけて定義を行なっている⁸⁾。訳文中に見られる脚注は全て原本に付与されたものである。ただし、原本の脚注記号は「*」であるが、当訳では全て通し番号に変更してある。また、訳者の註については適宜 [] で挿入した。誤訳や稚拙な訳に関しては、ご指摘いただければありがたい。

著者ヨーゼフ・リヒター関連年表

年	ハプスブルク君主国内部の出来事	国 外
1740	オーストリア継承戦争勃発	プロイセン、フリードリヒ 2 世即位
1741	ヨーゼフ 2 世誕生	
1748	アーヘンの和約、オーストリア継承戦争終結	モンテスキュー『法の精神』出版
1749	ハウグヴィッツ改革開始	ヨーゼフ・リヒター誕生
1756	「外交革命」：フランスとの同盟が成立 7 年戦争勃発	
1759		リヒター、ギムナジウムへ (10)

6) Degenhard Pott, *Briefe angesehener Gelehrten, Staatsmänner, und anderer, an den berühmten Märtyrer D. Karl Friedrich Bahrdt, seit seinem Hinweggange von Leipzig 1769 bis zu seiner Gefangenschaft 1789*. 5. Teil, Leipzig, 1798, 331.

7) 現在はデジタル化されており、バイエルン州立図書館のウェブサイトでも原文を読むことができる。

<http://www.mdz-nbn-resolving.de/urn/resolver.pl?urn=urn:nbn:de:bvb:12-bsb10562325-5> (2014/02/28 確認)

8) ハプスブルク君主国における「国民」概念の変遷については、中澤達哉「18-19 世紀ハプスブルク複合王政下の近代国民形成と政治的正統性 —— ヨーロッパの「極端なる典型」——」『西洋史論叢』34 (2012)、19-29、を参照のこと。

1760	カウニッツを中心に行政改革開始		
1763	フベルトゥスブルクの和約、7年戦争 終結		ルソー『社会契約論』
1765	ヨーゼフ2世即位、共同統治時代始まる (24) プラターを市民に開放		
1769	ヨーゼフ2世、ナイセでフリードリヒ 2世(普)と会談		
1770	マリー・アントワネット、フランス王 太子ルイと婚姻		
1771	ウィーンに最初の「規範学校」開校		
1772	ポーランド分割の結果、ガリツィア獲得		第一次ポーランド 分割
1773	イエズス会の解散とその財産没収	リヒターの学歴不明に(24)	教皇クレメンス14世、 大勅書発布
1774	普通教育規則を公布		フランス王ルイ15世 崩御
1775		リヒター、初の詩集出版(26)	
1776	王宮の隣に国民劇場を創設 ゾンネンフェルスの活躍により、拷問 の廃止		アメリカ独立宣言
1777	ウィーン大学図書館、開館		
1778	バイエルン継承戦争、勃発	リヒター、『製粉機』がヨーゼフ2 世の評価を受ける(29)	フリードリヒ2世、 ボヘミアに進駐
1779	テッシェンの和約、バイエルン継承戦 争終結		
1780	マリア・テレジア崩御 ヨーゼフ2世の単独統治始まる(39) 学校監督官に対する教育視察の義務化 ヨーゼフ2世、モヒレヴでエカチェ リーナ2世(露)と会談	リヒター、パリへ旅行(31)	
1781	一般裁判規則の公布 徴兵制の施行(オーストリア・ボヘミ アにて) 新関税法の実施(ティロール以外の オーストリア・ボヘミア地域) 「将来の正規の出版検閲を規定するた めの基本原則」発布 農民解放の原則の提示 教会に対する国家の優越権を主張する 宮廷命令 検閲法の公布 寛容令の公布 体僕制廃止令の公布(ボヘミア・モラ ヴィア・シレジアで実施)	リヒターの両親、死亡(32) 「パンフレットの洪水」が始まる	

1782	農民解放実施（オーストリア地域） ハンガリー王冠下全領域の行政一本化 エジプト貿易会社の設立 宮廷教育委員会と出版検閲中央委員会の合併 ウィーンに警視庁設立 修道院の廃止とその財産没収の布告 最高宗務委員会の設置 農民の移動の自由に関する領主と解放農民との利害調整を企図する命令 初等教育の義務制化に関する命令	リヒター、『大きな子供のためのABC本』を出版（33） ヨーゼフ・ヴァレンティン・アイベル、『教皇とは何か？』を出版 アロイス・ブルマウアー『オーストリアの啓蒙と文学を巡る考察』を出版	教皇ピウス6世、ウィーンを訪問
1783	農民解放実施（トランシルヴァニア） ガリツィアに対して土地制度に関する勅令発布 教区神学校・修道院学校の廃止 一般神学校の設立 婚姻令の発布 官僚に対する教書の公布	ヨハン・フリーデルが『ウィーンからの手紙』を出版	パリ和約、アメリカ独立承認
1784	農民に対する領主の強制の制限（ガリツィア） 新聞税法の実施（ハンガリーを含む全領域） トルコと最恵国待遇を伴う通商条約締結 ウィーン総合病院の設立 ウィーンに宮廷慈善施設委員会と宮廷慈善施設最高管理局の設立 言語法の布告 宮廷租税規制委員会の設置 再度、農民へのあらゆる強制の廃止規定を発布 ハンガリーのシュテファン王冠をウィーンへ移動 外国製品の輸入禁止	匿名で『ベルリンからの手紙』が出版され、論争が起きる。	
1785	農民解放実施（ハンガリー） 体僕制廃止令の発布（ハンガリー） コミタート制の廃止・フランス風の管区制度導入（ハンガリー） 各領邦の首都毎に警視庁の設置 親方権についての世襲制限の撤廃 ロシアと最恵国待遇を伴う通商条約を締結 オーストリア東インド会社の解散 フリーメーソン勅令の公布 税制に関するいくつかの勅令発布 農民の移動は領主の許可を要するという宮廷命令の発布 ベルギーとバイエルンの交換交渉失敗	リヒター、ヨハナ・メングヴァインと結婚 『アイベルダウアーの手紙』の出版開始（36）	プロイセン中心の「ドイツ諸侯同盟」の成立

1786	農民解放実施（ガリツィア） 警察業務に関する秘密指令発布 移住令の公布 相続令の公布 賦役の廃止を規定（ガリツィア） 「一般民法典」第1巻の出版	フリーメーソン勅令をめぐる一連のパンフレットの出版が相次ぐ 殺人犯ツァールハイムの死刑、それに伴い皇帝批判パンフレットが出版される 横領で逮捕された老齢のハンガリー貴族セーケイが名誉刑を伴う懲役刑。セーケイ事件を扱ったパンフレットが出版される。 リヒター、『ハンスヴルストの統治』を出版（37）	
1787	「刑法典」の出版 賦役軽減などの4つの命令発布（ハンガリー） ヨーゼフ2世、エカチェリーナ2世（露）と会談 ベルギーで騒乱	リヒター『なぜ皇帝ヨーゼフは民に愛されないのか?』を出版（38）	ロシア、トルコと開戦
1788	トルコ戦争勃発 ハンガリーで騒乱		
1789	地租勅令の発布 新税制の徴収開始 ラウドン将軍、ベオグラードを占領 ハンガリー及びベルギーで反乱勃発		フランス革命勃発
1790	ヨーゼフ2世崩御、(49) レオポルト2世即位		
1791	トルコ戦争終結 プロイセンと協同でビルニッツ宣言		
1792	レオポルト2世崩御、フランツ2世即位		
1793	オーストリア、対仏戦争に参戦		第1次対仏大同盟成立
1794	ウィーンとハンガリーでジャコバン派逮捕	リヒター、この頃から秘密警察と関係（45）	
1802		リヒター、秘密警察基金から月額30グルデン受給（53）	
1804	オーストリア帝国成立、フランツ1世		仏でナポレオン、即位
1813		リヒター死去（64）	

【翻訳：ヨーゼフ・リヒター著

『なぜ皇帝ヨーゼフは民に愛されないのか?』】

これだけは前もって述べておかねばなるまい。すなわち、私が「民」という言葉を国民の大部分の人々という意味に理解していることを。個々の臣民は確かに自分たちの君主を愛しており、農民から大臣にいたるまで、皇帝ヨーゼフの支持者や友人、賛美者がいない階層なんて存在しないだろう。しかし国民の大部分、すなわち、民は彼を愛していない……。さもなければ、極めて賢明な布告に対する過小評価はどうしてなのか？ ヨーゼフが危険に満ちた旅を行なっても、それに対する無関心はどうしてなのか、幸運にも自分の民の下に帰還したときに見せる冷淡さはどうしてなのか？ 君主を愛している民は君主に対する誹謗文書を読むのが好きなのだろうか？ このような誹謗文書を狂ったように買いあさり、流布させるのだろうか⁹⁾、あるいは著作者を軽蔑する代わりに拍手喝采¹⁰⁾で迎えるのだろうか？ 従って、ヨーゼフが民に愛されていないのは証明済みの真実なのである。しかし、この世界ではありとあらゆるものに理由があるので、このような反感にも十分な理由があるに違いない。そして、おそらく、私はそれを見つけることができるだろう。

最初にヨーゼフが民のためにどのようなことをしたのかを挙げ、それから皆から愛されるために彼がおそらくすべきだったことを挙げることにする。

9) 例えば、イエズス会士ではなく、プロイセン人が（おそらく、まだウィーンで絶えず受けている素晴らしい歓待に感謝するために）書いた『ベルリンからの手紙』。[ここに挙げられている『ベルリンからの手紙』は1783年から1784年にかけてウィーンで論争になった作品である。当初、ウィーンの作家たちはヨーゼフ2世の啓蒙政策やウィーンの言論界に対する批判を含んでいた『ベルリンからの手紙』の作者をイエズス会士だと推測したこともあったが、『愛されないのか?』はここでこの作者をプロイセン人であると推定している。]

10) 例えば、『シュレンドリアン』の著者やその他の多くの作家を。[ここで挙げられた『シュレンドリアン』はフランツ・クサーヴァー・フーバーの『シュレンドリアン氏、あるいは新しい法典の裁判官』のことを指している。この作品はヨーゼフ2世の法典編纂についての風刺作品である。]

もっとも、もし君主というものが皆に愛されることがありえるという仮定の下でだが。

忘れ難きテレジアがまだあらゆる人間に課された死という運命に至る前に、ヨーゼフはすでに、将来単独統治者になった時、よそ者の目で見ることなく、よそ者の耳で聞くことなく、民の父になるために、自らの国家を旅して回った。けれども、民は彼を愛さない。

ヨーゼフは一度ならず何度も偉大なる母の優しい腕を振りほどいて無数の危険の中を、ただ神の加護のみを携えて、遠く離れた異国の地¹¹⁾に急いだ。そして、その地の支配者と永続的な平和の絆を作り出し、無数の新しい知識を豊富に伴って自国に帰還した。にもかかわらず、民は彼を愛さない。

穀物に対する高利や隣人による狡猾な買占め、あるいは劣悪なポリツァイ施設がどこかの地方で物価上昇や飢饉¹²⁾を引き起こすと、害悪を阻止する守護神ヨーゼフは暴利を貪る者を処罰し、不足を余剰に変えた。猛威をふるう飢饉の犠牲になるはずだった多くの人々がそのおかげで生きている。にもかかわらず、民はヨーゼフを愛さない。

言論の自由は皇帝による慈悲ではなく、人間が生まれながらに持っている権利である。長い間、言論の自由は誤って理解されていた国家原則¹³⁾によって臣民に渡されることはなかった。ヨーゼフは言論の自由を統治の舵が自らの手中に入るや否や民に返還した。にもかかわらず、民は彼を愛さない。

領邦の相当部分がひどい体僕制の鎖に繋がれていた。ヨーゼフは体僕制を打ち砕き、法の中で抑圧されていた人間に諸権利を復元し、君主と臣民との本当の関係を作り出した。にもかかわらず、民は彼を愛さない。

支配的な宗教を信奉することを表明しなかった者は市民が持つ極めて多くの

11) ロシアやフランスへの旅行。

12) 例えば、ボヘミアで。

13) 既に信心深いファン・スヴィーテンは女帝にこの国家原則が有害であると立証し、思想・言論の自由のために尽力していた。しかし、どんなにスヴィーテンが女帝のお気に入りであったとしても、ここでそれを押し通すことはできなかった。

特権から締め出されていた¹⁴⁾。すなわち、自らの名前でどんな財産も家も物も所有することができず、一度も公に自分の神を崇拝することができなかったのである。ヨーゼフはそうした市民にも市民が所有する全ての権利を与えた¹⁵⁾。にもかかわらず、民は彼を愛さない。

以前は佞臣や小専制君主が皇帝に近づく道を遮断しており、こうした佞臣や小専制君主を味方につけることができない者は、その訴状を**装飾なし**で君主の耳に入れることもできなかった。ヨーゼフは自分の周りに一人の佞臣も専制的な召使も許さない。ヨーゼフの所に参内する道は誰にでも差別なく毎日いつ何時も開かれている。にもかかわらず、民は彼を愛さない。

法は曖昧、裁判の進行は遅々として、裁判官は法を弄び、法律顧問は騙されている当事者の財産で私腹を肥やしていた。ヨーゼフは法を改善し、裁判の進行を早め、弁護士の過剰な欲望を制限した。更にヨーゼフは買収されないような人物を裁判官に任命した。にもかかわらず、民はヨーゼフを愛さない。

百万の人々が生活や贅沢への欲求のために異国に殺到した。国民の精神は怠惰の中にあった。我々は我々のお金で私腹を肥やす外国の嘲りの的であった。確かに偉大なるテレジアは国民の精神を活気づけようと努力したが、経験不足の顧問官やほとんど全てが外国人の雇われ仲買人であるわが国の商人たちは、有益な公共施設を芽吹かせることはなかった。ヨーゼフは外国商品の輸入を禁止して、害悪を根源から断とうとした。ついに国民全体が息を吹き返し、たくさんの新たな生計手段が開かれ、工場が栄え、外国の芸術家や手工業者は自分たちの知識を我々にもたらしている。我々の商人は自ら、有害な外国人の仲買人から、国内貿易について自分で考え、発見し、上昇させる者へと変化している。また、外国人は我々を嘲ることなく、今や我々の発展を妬ましそうに眺め

14) 聖職者のせいで可能な限りの侮辱に耐え忍ばねばならなかったにもかかわらず、領邦法に従って支配的な宗教と一緒に特権を享受しているような領邦は除外された。これに関してハンガリーのプロテスタントが参考になる。

15) 確かに今にいたるまでなおユダヤ人はこのような特権から除外されてきた。この頑固な民族が自らの宗教システムを変えないかぎり、どんな健全な政治も彼らに残りの市民と平等な特権を許すことはできない。

ている¹⁶⁾。これらは全てヨーゼフがやったことである。にもかかわらず、民は彼を愛さない。

数え切れない市町村で司牧者が全くいないか、あるいは住民が数時間も離れた場所で授業や宗教上の慰めを求めなければならないかであった。ヨーゼフはどの村にも彼らの教師であり、友であり、慰めであるべき宗教上の羊飼いを与えた。にもかかわらず、民は彼を愛さない。

聖職者の大部分は迷信にすぎり、キリストの教えが何を言わんとしているのか知らず、全く教えられていないのかあるいは間違っただけで教えられていた。そのため、他の信者に教えることができなかった。ヨーゼフはほとんどの地方に司牧者や小学校教師のための養成学校を創立し、思慮深い適切な人々を責任者に選んだ。この養成学校の成果は既に期待に込められている。にもかかわらず、民は彼を愛さない。

税金の徴収は一定の比率によらず、煩わしく重くのしかかっていた。貧しい人々は税金を払いすぎ、資産家は僅かしか払っていなかった。ヨーゼフは税金を所有地や所得に応じて徴収することでここに一つの賢明な均整を取った¹⁷⁾。にもかかわらず、民は彼を愛さない。

修道士の数は勤勉なミツバチから良質の蜂蜜を掠め取るマルハナバチに喩えられるほど、おびただしく増加していた。修道士たちは農夫から奪ったパンを食べ、貧しい葡萄園経営者から奪ったワインを飲んでいて、賢明なるミツバチの父として、ヨーゼフは勤勉な市民をこの有害なマルハナバチから解放した。にもかかわらず、民は彼を愛さない。

ローマがドイツ諸侯に課していたくびきは屈辱的であった。司教はもはや領邦君主の臣下ではなく、教皇の臣下であった。百万人の人々が百通りの道を通って教会国家に押し寄せた。ヨーゼフは奴隷の鎖を打ち砕き、ドイツ国民の

16) それゆえに、我々の著作や改善された施設に対するベルリン人やザクセン人の悪意のある攻撃がある。彼らは我々の上昇を阻むことはできず、それゆえ我々の偉大さを疑おうとしたり、世間の人々に我々全体が後退していると訴えかけたりしようとする。だから、嫉妬はいつでも中傷のための逃げ道になる。

17) 新しい税制。

名誉を守った。ローマに流れて行く金の通る下水路は、ほとんど全て塞がれた。ローマは苦しむが、その住民は溜息を漏らしながらも、何者も恐れないヨーゼフの勇気に驚き感嘆している¹⁸⁾。にもかかわらず、民は彼を愛さない。

一般庶民は長い間、木陰の多い公共の場での健康的な散歩を楽しむことができなかった。ヨーゼフは彼らにすばらしいプラーターと趣のあるアウガルテンを公開した。ここではヨーゼフ自身よく衛兵や護衛なしで多くの市民の中に混ざり、**市民の愛**以外に全く衛兵を必要としないことを示している。にもかかわらず、民は彼を愛さない。

やぶ医者 of 無知は恐ろしい。彼らの治療法は多くの人々の命を病気のせいにして奪ってきた。ヨーゼフはいんちき医者 of 治療を止めさせ、至る所に資格審査を受けた外科医を置いた。ヨーゼフは臣民に適切な精神科医を与えた後、今や身体 of 病気に関して熟練した医者までも臣民に与えた。にもかかわらず、民は彼を愛さない。

臣民が何の心配なく休息している間、ヨーゼフはたいてい睡眠という腕から身を振りほどいていた。よく朝日は書き机にすでにヨーゼフが座っているのを見つける。そこで彼はすばらしい草案を作り、計画を検討し、苦情を調べ、正義を語り、危険を防いでいる。要するに、ヨーゼフは国民の半分以上が眠っているときも起きているのである。にもかかわらず、民は彼を愛さない。

ヨーゼフは多くの君主が過去も現在も行なってきたように、情欲に身を捧げ、国家 of 収入を愛人に割き、売春 of 取り持ちに報い、新しい歌手にお金を支払い、新しいオペラハウスを建設するために、増税通知を出すこともできたはずである。なんとヨーゼフは全く違うことを考えているのだ！ 彼は女性たちを奴隷にすることなしに敬い、彼の食卓は決して私人 of 食卓ではなく、国家 of 収入は彼にとって正直な人に任せられたお金のように神聖なもので、自らの楽しみに国家を費やさせることは全くなかった。にもかかわらず、民は彼を愛さなかった。

18) 特にヨーゼフが教皇に対して行なった答礼訪問において。

火災が発生する、あるいは河岸から川が氾濫する、あるいはどのような不幸でも市民が遭うと、ヨーゼフは救い手としてそこに急行し、助けられるのならば助ける。救済が無駄であっても、彼は苦しんでいる人を慰め、贈り物をし、補償し、援助する¹⁹⁾。要するに、至る所でヨーゼフは賢明でよき立派な君主の勤めを果たすのである。にもかかわらず、民は彼を愛さない。

いったいどうして民は彼を愛さないのか？

私の見解によれば、それは次のような原因から発生したと思われる。

皇帝ヨーゼフは改革者であり、宗教上の問題においてすらそうである。彼は修道士や修道女を廃止し、司祭の過剰な収入を削減し、無為な聖職者に研究や仕事、実践的なキリスト教の信仰を促した。それによって、多くの司祭はヨーゼフの敵になり、彼らと共に司祭に共感し、司祭に同調する民も敵となった。

皇帝ヨーゼフは貴族の力を制限し、以前は高貴な生まれのものの特権であった利得に制限を与えた。それによって、先祖を除いて他に功績のなかった貴族の大部分は、ヨーゼフの敵となり、彼らと共に秘書事務官、近習、管理者、検査官、穀物倉庫の管理人、そして事務員などの、貴族自体よりも頻繁に臣民を苦しみ、支配してきたが、今や支配を禁止されてしまった後衛も敵となった。

皇帝ヨーゼフは高額給料でそれほど働いていなかった官吏たちに義務を課した。それによって、多くの給料を切望しながらも、あまり働いていなかったあらゆる官吏がヨーゼフの敵となり、彼らと共に夫人、叔母、連れの女性、下僕、侍女などの、夫や従兄、あるいは主人がヨーゼフ帝について嘆き悲しむのを見たために、ヨーゼフ帝についていろんな事を喚き叫んでいる多くの取り巻き連中も敵となった。

商人の大部分は闇取引によって生計を立てていた。外国製品の禁止はしたがって商人から非常に優れた生計手段を遮断し、彼らに合法的な手段を考え出すように命じた。それによってほとんどの商人はヨーゼフの敵となり、彼らと

19) このような行動は火薬塔の爆発事件や多くの洪水の際に行なわれた。

共に重ねて、商品の検査員、商店の奉公人、親類や食事仲間などのあらゆる支持者も敵となった。

工場経営者にはヨーゼフの統治を祝福する理由があったはずであった。しかし、皇帝ヨーゼフはもはや独占的自由を与えなかった。それによって、一人だけ輝き、一人だけ利益を獲得している多くの工場経営者は自分たちより大きな経営者や自分たちと同規模の経営者たちを認めたくなくて、ヨーゼフの敵となった。

皇帝ヨーゼフは司法に比較的足早な歩みを与え、法を改善し、裁判官の手数料をカットした。法律を自分たちの利益にまわすことを知っていたかなりの数の弁護士、裁判官を全て敵にすることは、もはやいうまでもない。

要するに、皇帝ヨーゼフには非常に多くの敵がいる。それは、彼が改革者であり、どの改革も不満を伴うのは必然であるからである。またたとえ天からの天使が改革者として我々人間の前に舞い降りたとしても、多数の敵を持つことになるからである。けれども、私が思うに、不満を持つ人びとの心を再びつかみ、民のアイドルになることは、我々の偉大なる皇帝にかかっている。手段を書いて見せるのは私には相応しくないのだが言わせてもらおう。多くの民の中の高貴なる精神の持ち主が何を望んでいるのかを。

彼らは望む。皇帝ヨーゼフが年金や俸給を考慮して規定に賢明な変更を加えることを。何故に勤務期間が10年に満たない官吏の寡婦は恩給をもらえないのか？ 勤務期間が収入額を決め、5年間国家に仕えた有能な官吏は10年勤めた別の官吏よりも報われえないのか？ この規定によって、それ程ではないにしろ何人かの官吏が結婚に恐れをなし、そのことで好ましい最終目標、すなわち人口を失っているのではないか？ 家族が父を失うというだけで、すでに十分に不幸なのではないだろうか？ 規定にしたがって父親に若干勤務期間が足りないといった理由で彼らは更に極めて貧乏な状態に落とされなければならないのか？

民の中の高貴なる精神の持ち主は望む。皇帝ヨーゼフが大臣や顧問官を召使のようにではなく友人のように扱うことを。愛は厳格さよりも常に早く最終目

標に到達する。愛は義務を楽しみで満たすように作用する。軍隊では、全身の大部分が不自由な手足からできているので、確かに厳格さが機械の主な原動力となる。しかし、文民は自由意思から成り立っている。それゆえ民の中の高貴なる精神の持ち主は望む。皇帝ヨーゼフが大臣や顧問官、官吏を兵士のように扱わないことを。

どんなに民の中の高貴なる精神の持ち主が皇帝ヨーゼフの博愛的な施設、すなわち、総合病院、軍人病院、助産院、孤児院などを尊敬し、祝福したとしても、彼らは再度望む、ヨーゼフが賞賛に値する多くの他の施設、例えば、救貧院、カイザーシュピタルやヨハネスシュピタルなどを廃止しないでくれたらよかったのにと。なぜならこうした施設を廃止することで数千人の人々が傷つけられ、全てが設立者の考えに反して行なわれたからである。つまり、この設立者たちは、単なる生活費だけでなく、収容された人々の快適さや安寧、満足度にも注意を向けていたのである。皇帝ヨーゼフは、継続的な慈善活動を廃止することで、人類の不利益となるように、ついには臣民に制限を加えてしまったのではないかと。善良な寄付者の意図に反する行動を取り、そのお金を全く別の目的に使うのを見て、誰がそのような慈善的な寄付をするのか？

民の中の高貴なる精神の持ち主は望む。皇帝ヨーゼフが文民を軍隊と同様に愛することを。多くの文民職²⁰⁾が軍人の功績に与えられることを見ることは文民の功績にとって侮辱であり、弾圧である。

民の中の高貴なる精神の持ち主は望む。[各領邦の] 首都に住む官吏や市民の子弟が軍隊への召集から再び解放されることを。首都は常に文化と学問の鎮座する場所であった。しかし、自分の息子が兵隊に召集されることをすぐに確信するのなら、誰が自分たちの息子に文化や学問を捧げるだろうか？ マスケット銃兵にするために、誰が子供に数千グルデン費やすのだろうか？ このプロイセン式制度の結果はほとんど明白である。多くの若者が兵士になるのに

20) 例えば、顧問官や事務官の職やそのほか多くの、運動に慣れ、あらゆる物をすばやく攻撃し、それほど粘液質でない兵士にはあまり向いていない、あるいは全く適していないような職のこと。

は何も学ぶ必要がないと考えるので、のらくら者でありつづける。市民の精神は意気消沈し、年配独身者の数は日に日にひどく増えつづける。このことは次のようなことを声高に言っているのである。すなわち、市民は兵士を生みたくはないので、女性を娶らないということを。我々は兵士しか必要としないわけではない。我々は手工業者も芸術家も徒弟も持たねばならないし、本来は彼らが一緒になって兵士を養わなければならない。

民の中の高貴なる精神の持ち主は望む。皇帝ヨーゼフが狂気の兆候なしに自殺した不幸な者を皮剥ぎ場に埋めさせたりしないことを。というのは、当事者ではなく罪のない家族が恥をかくからである。啓蒙思想家は、いずれにせよ、すべてのものが自然の一部に溶け込み、この部分が至る所に飛散し、従って志高き者の粒子も信心深き者の粒子も偉大な者の粒子も皮剥ぎ場にある穴の中に見つかることを知っている。従って、屈辱的なことは存在しない。誰がいったい何が狂気で何が狂気でないかを確信を持って決定できるほど深く人間の本質を見つめるのか？ このような侮辱的な埋葬方式の最終目的は確かに他の人の自殺を防ぐことである。しかし、その成果はこの最終目標が達成されないことを示している。

民の中の高貴なる精神の持ち主は望む。皇帝ヨーゼフが犯罪者を冷たい法律によって処理させるのではなく、不幸な犯罪者に対しては邪悪で抵抗力のついた犯罪者に対するより穏やかに振舞うことを。そして、このような不幸な者たちに復讐するためには、あるいは彼らの刑罰について喜びを表明するためには、皇帝の心はあまりにも崇高に考えすぎるので、彼らはあらゆる刑罰が改悛を目標とすることを心から望んでいる。君主というものはキリスト教の神に似るべきである。すなわち、君主というものは厳しい裁判官であるべきではなく、慈愛に満ちた父親であるべきなのだ。厳格さは心をかたくなにするだけである。しかし、寛大さと好意は心をつかむのである。

民の中の高貴なる精神の持ち主は望む。皇帝ヨーゼフが総じて人間のそれ程有害でない欠点や弱点を多少大目に見ることを。このような弱さの下には、自身を袋の中に縫い込ませ、それから互いに入り乱れて石灰を貯える穴の中に投

げこませること〔ヨーゼフ2世が導入した埋葬方法〕に対する反感が属する。確かに、啓蒙思想家にとっては、自分がどこで腐敗しようと、同じことである。しかし、あらゆる人間が啓蒙思想家であるわけではない。更に、感情豊かな人間にとって本当に何か精神の高揚や慰めのようなものが「私の骨は休息の場所を持っていることだろう。私の子供たち、私の孫たちは私の墓へとやってくることだろう。私は彼らの記憶から拭い去られることはないのだ」というような思考の中にあるのだ。あるいは、感動した母が子供たちを夫の墓に連れていき、「ここにはお前たちの父親が眠っているのよ。父の愛を思い出して。お前たちは徳が高く父のような実直な男になるのよ」と言うのなら。私がここで言うことは誹謗ではない。もし夫の遺骨がそこに眠っていなかったとしたら、非常に優れていたテレジアはひょっとして本当に心から感動して忘れ難き夫の墓前で祈りを捧げていたのだろうか？ 要人が特別な墓を持ち、生前民の中に混じるのをとても好んだ偉大な皇帝が将来民のもとで眠らないだろうと見ているのに、今日の埋葬方法に対するこのような民の反感は悪く捉えられるべきなのだろうか？

民の中の高貴なる精神の持ち主は望む。皇帝ヨーゼフが重犯罪人の刑罰においても生まれや地位を幾分か顧みることを。聖職者の犯罪はひそかに処罰される。というのは、おそらく、民がもし神の司祭が公に懲らしめられるのを見たとしたら、最後には宗教に対する尊敬の念を失ってしまうと恐れているからである。しかし、政務顧問官や法律家や顔が知られている他の人の場合には同一の状況が生じないのか、下層民が行政事務官や法律の執行者が路地を掃除しているのを見て以来、既に法律そのものに対する敬意を失ってしまったのではないだろうか？ 確かに、宮廷顧問官や伯爵ではなく、詐欺師や文書の偽作者が重懲役刑の服役者として現れると言われている。しかし、下層民はこのような面から物事を捉えない。というのは、下層民はまだこの時間まで「今日、伯爵や政務顧問官等々が路地を掃除していたぜ」と言っているからである。誹謗は、そのような公開刑罰によってすでに品位があり、国家に功績のある何組かの家族に無責任に与えられてきた。そして最終的にその誹謗は、皇帝ヨーゼ

フが父の目をこのような対象に向けたのに貢献したのだ。

皇帝ヨーゼフが借金を作った官吏を厳格に扱っていることは公正である。しかし、民の中の高貴なる精神の持ち主は望む。皇帝ヨーゼフが官吏たちに借金を作ってはいけないと教えることを。彼らは望む。給与規則において特に官吏の家族を顧みることを。そのような顧慮がそれだけ一層、多くの子供によって負担をかけられている官吏を夫として持っていた未亡人に対する年金に対して向けられることを。何人かの未婚者はしばしば 1000 か 2000 グルデン貰い、6、7 人子供がいる者は大抵 300、あるいは 400 グルデンで生活しなければならない。官吏が得るお金はいずれにせよ高利で国庫に戻っていくのだ。

民の中の高貴なる精神の持ち主は望む。皇帝ヨーゼフが勤務で白髪になるか、仕事が全くできなくなってしまった老齢官吏にもっとよい年金を与えることを。そういった官吏たちがもたもたした老齢の中で極めて惨めに生活する必要があるように。同じように彼らは望む。国家の公僕がお仕着せ奉公人のように解雇されないことを。

また民の中の高貴なる精神の持ち主は望む。皇帝ヨーゼフが官吏の誤りや見落としを、それが極めて重要なことや実際の国家犯罪でないのなら、決して罷免で以って彼らを罰しないことを。少なくとも官吏に家族がいる場合は特に。国家は意図的に不幸な家族を作る必要はない。なぜなら、不幸な家族は最終的に国家自身の重荷になるのだから。

儉約は君主のすばらしい徳であり、これまで十分に貯えのなかった国家にとっては一層必要なものである。ただこのような徳にも限度があるゆえ、民の中の高貴なる精神の持ち主は望む。ヨーゼフの儉約が徳であることをやめてしまいうラインにまで行ってしまわないことを。人間の肉体は、心臓が流れる血液を身体に返すちょうどその時、健康であるとわかる。では国家の肉体もそうではなからうか？

民の中の高貴なる精神の持ち主は望む。皇帝ヨーゼフがなぜ貧民の数が日に日に増加しているか、また、結局、善意だったにしろ、ある種の指令や廃止に責任があり得ないかどうかを調査することを。

敢えて口にすることはほとんどないが、民の中の高貴なる精神の持ち主は望む。皇帝ヨーゼフが決断の際に決して性急過ぎないことを。多くの家庭がそのことで容易に不幸になるのを。またこうも望む。**良いことすべてからすぐに果実をつもうとするヨーゼフの落ち着きのない情熱がその良いこと自体を花の段階であまりに頻繁に窒息させないことを。完全に成熟していなかった法典はどんな弱点をさらけ出したのだろうか？**〔リヒターはここでヨーゼフが法典編纂事業を性急に推し進めたことを批判している。〕そして、そのせいで、我々が再度外国から見てどれほど落ちぶれてしまったのか？

民の中の高貴なる精神の持ち主は望む。皇帝ヨーゼフがむやみに進んで密告者に耳を傾けないことを。友が友に対して家族が家族に対して疑い深くなり、それによって人間社会の絆が破壊されるよりも、犯罪者があちこちで隠れつづけた方が国家にとって害は少ない。

民の中の高貴なる精神の持ち主は君主が誰にでも自由な出入りを許可していることをたたえている。しかし彼らは同時に望む。君主が例外なく全ての請願書が送られる役所に対して署名が無い物についても上申したり、紹介したりするのを許可することを。というのは何人かの賞賛に値する請願者が署名の欠如から極めて正当な問題ではねつけられることが起きるからである。

民の中の高貴なる精神の持ち主は望む。皇帝ヨーゼフが芸術と学問にもっと敬意を払うことを。というのは芸術がパンに従属し、民の啓蒙に努めてきた作家が飢えに苦しむなら、そのことは国民にとって恥であるからだ。民は我々の国法によると平凡な知識だけでなく、より高尚な知識やすばらしい学問も必要としているのである。

このようなことがだいたい民の中の高貴なる精神の持ち主の望みである。おお神よ、どうか皇帝ヨーゼフがこれを満たす、いや差し当たり少なくとも読んでくれますように。

アーメン。